慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宮城縣利府村 春日瓦燒場 大澤瓦窯址研究調査報告(内藤政恒著, 東北帝國大學法文學部奥羽史料調査部)
Sub Title	
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.17, No.4 (1939. 7) ,p.158(686)- 159(687)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390700-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

宮城縣利府村春日瓦燒場大澤瓦窯址研究調査報告

（內藤政恒著、東北帝國大學法文學部奥羽史料調査部）

從來瓦窯址に關しては比較的纏つた報告書或ひは科學的研究の不足が嘆ぜられて居り、新しい研究の成果が待望されて居たのであるが、本書はその先鞭をつけたものとして、例へ一遺跡の發掘報告に止るとは云へ、今後の研究に幾多の重大なる示唆を與へた點に於いて、意義深いものと云はねばならない。我々は本書によつて渴を癒されたと共に、之を基礎として進むべき正しき針路と、勇氣とを與へられたのである。

云ふ迄もなく此の報告書は昭和十一年夏、同大學文學部講師伊東信雄、助手山本桝藏、囑託內藤政恒の三氏によつて行はれた宮城縣利府村春日大澤にある一窯址の發掘報告である。而して主として內藤氏が事に當られ、又執筆の勞を採られた關係上、著者も同氏として發表されて居る。內藤氏は古瓦研究者として既に定評があり、特に東北方面の古瓦に造詣が深く、眞に本遺蹟研究の適任者であり、本書の論述中にも平素の蘊蓄が燦として光を放つて居る。

本書は七章に大別され、本文八十三頁、三十八葉の圖版と、三十七個の挿圖が附加されて居る。卽ち第一章序說に於て本窯址の發見と從來の研究及び發掘の動機等が略述され、第二章には此の地の位置、地形に關して詳細な記述がある。本章は僅か數頁にすぎないが、地形、地質に就いて同大學專門家の助力による綿密な調査がなされて居ることは著者の周到なる用意の程が窺はれる。

第三章は發掘調査の研究に費されて居るが、酷暑を冒して行はれた當事者の勞苦が言外に溢れ、惡條件を克服して、輝しき成果を擧げられた並々ならぬ努力に敬服させられるものがある。

第四章に到つて本遺蹟の全貌が報告されて居る。本章は十節に分れ、五個の窯址と五ケ所の附屬遺蹟に就き詳細に記述されて居る。細かい點に關しては直接本書を手にせられんことを望むが、大略を記せば、此の瓦窯は狹い谷を挾む丘陵の傾斜面の一側を利用して造られて居り、今回の發掘によつて五個の瓦窯が發見されたが、之等は何れも幅約一米、長七米前後の登窯で緩かな傾斜を有して居るものである。その天井の復原は發掘者の最も苦心された所であるが、綿密な調査によつて、アーチ形のものであつたことが判明し、その高さも〇・八五米であつたことが報ぜられて居る。その他構造、殘存、狀態等に關しても重要な詳しい記述がなされて居ることは云ふ迄もない。

五個所の附屬遺蹟は粘土貯藏所、瓦乾燥場かと思はれるものもあるが、大體に於いてその性質が明かでない。

第五章は發掘遺物に關する論述に充てられて居る。第一節には本遺蹟出土遺物の殆んど全部たる古瓦類の研究結果が記され、第

二節に伴出せる須恵器に關する記述があり、第三節に於いては瓦の成分に關する化學的研究結果が發表されて居る。之は主として瓦の色調と硬度に關する研究であるが、多くの示唆に富み本書中、最も注目すべきものである。即ちその結果によれば本遺蹟出土古瓦に關する限り色調及び硬度の變化はその成分の如何によるものではなく、殆んど燒成度の相違によることが明かとなつた。つまり瓦の色調及び硬度は燒成溫度の高低により、粘土中に含まれる鐵分の四三酸化鐵となるか、酸化第二鐵に變ずるか、によつて主として決定されることが判明したのである。寡聞な自分の知る範圍では此の研究結果は今回初めて明かにされた事實であり、之を學界に報ぜられたことに對して深く感謝の意を表したい。右の事實よりすれば、著者の說かれた如く、瓦の色調、硬度等から簡單に火災に遇つたものか、否かを決定し難いことが明白であり、從來の所說に大いなる改定を要する場合も少くないと思はれる。

第六章は仙臺附近の本遺蹟と關係深い他の瓦窯址の概說であり、第七章の本遺蹟出土古瓦と附近の瓦窯址、或ひは寺址、城址出土古瓦との比較研究と共に、全く著者の獨壇場であり、長年に亙る氏の撓まざる研究の成果を惜し氣もなく發表、駈使されて居る所は壯觀である。此の二章を一讀しても、假令一部分なりと雖も、此の地方の古瓦に就き多大の啓發を受けることであらう。同時に古瓦研究法に關しても或る種の暗示を受けることが少くないと信ずる。

第八章は結論であつて、前七章を要約し、特に本遺蹟の瓦窯の構造復原に就いて述べられて居る。

本報告書の體裁は大體以上の如くであるが、要するに最近の考古學研究報告書として最も高く評價さるべき快著であると斷言して憚らず、發掘者、執筆者の飽く迄眞面目な研究態度に敬意を表すると共に、第二、第三の報告書が同調査部より陸續として刊行されんことを希望して止まない次第である。（清水潤三）

後鳥羽天皇を偲び奉る

（平泉澄著　水無瀨宮社務所發行）

本年は後鳥羽天皇の崩御の後七百年に相當するを以て、三月一日其の奉祀の官幣中社水無瀨宮に神宮の嘉號を賜ひ、且つ官幣大社は昇格せられ、四月四日神宮に於ては嚴かに御式年祭が行はれ、又記念として本書の刊行を見るに至つた。

本書は卷初に於て天皇の承久討幕の動機を一婦人龜菊の所領問題に歸する舊說を排して、其の計畫は既に十數年前にありしと證明せられ、それは承元元年十一月白河に最勝四天王院を創建せられし頃で、こゝにて幕府調伏の祈願を行はして、且つこゝを以て其の參謀本部となし、其の參謀格は、僧侶に於ては二位法印尊長と、武士に於ては能登守藤原秀康であり、討幕の準備は着々と進められたが、先づ王政復古精神の作興として、文事にありては朝儀の復興と其の習禮を屢行はしめ、更に親しく世俗深淺秘抄を著はされ、皇子順德天皇も亦禁秘抄を撰ばせられ、武事にありては、自ら弓馬を鍛錬、鍛刀を奬勵せられ、承久三年五月十五日愈〻其の時至り機熟したりとなし、討幕の大旆を翻された。然し不幸衆寡敵せず、官軍忽に敗北を以て終局し、其の處分は實に苛察冷酷を極